

寺行き・二人使いについて

現在でも人が亡くなった時、当家が菩提寺へお使いを出し、事の告知をすることが行われております。その意味は、葬儀の打ち合わせをする為であると現在では思わせておりますが、古い記録を紐解いてみると決してその意味だけではありませんでした。実はお使いにはとても重要な意味があり、その人数まで決まっていたのです。

○呼称について

我々の地元では、単に「お使い」と呼ぶことが多いですが、民俗学的には「寺行き」と呼ばれ、「二人使い」という呼称も多く用いられていたそうです。その名前から、人数の規定が窺われます。

○人数について

現在、多くの場合でお使いは二人です。これは二人使いという言葉があるように、全国的に古くからお使いは二人とされてきた名残です。では何故二人なのでしょうか。

○近隣への告知

ここで、菩提寺への告知の他に、近隣への告知を考えてみます。今の世では、告知を電話一本で行うことが出ますが、昔はそうはいきません。やはりお使いを出しますが、やはり二人との規定がありました。その理由の一つに、一人で行くと亡者が後ろからついてくるので二人で行くという伝承があります。また、葬家の血縁の人でないとならない、道中口を開いてはならない、決して告知する家へ入ってはならない等々の様々な縛りが地域ごとにあったそうです。また、どうしても一人で行く場合は、腰に鎌を下げて行くという風習もあったそうです。他には、昼間であつても必ず提灯を持つ、足元は必ず草履を履くという伝承がある地域もあります。提灯は、お盆の時で分かるように、その灯が霊の依代と考えられます。また、草履は古来より笠と蓑とセットで語られ、(この伝承では草履のみが残った)それらは死者が着用するものであるとする説があります。(あの世へ旅立つ装束であった)これらの伝承から分かることは、亡者の魂と一緒に近隣へ告知しているということです。依代の提灯は言わずもがな、草履に関しては、亡者に扮しているということになります。そうなると、二人使いとは本来、生者と亡者の二人という意味とも考えられます。弘法大師との同行二人が如しです。

○寺への告知

前述の近隣への告知と違う伝承に、米を持参して告知へ行くということがあります。これも全国的にみられたようですが、現在はほとんど失われてしまっています。これは布施の米ではなく、亡者の魂の依代としての米とされています。つまり、告知人と亡者の魂が寺へ行くということです。そう考えると次の話がよくわかってきます。

昔から、お寺では男性が亡くなると本堂で、女性が亡くなると台所で物音がして、そして間もなく寺使いが告知に来るといふ話が伝わっています。告知人と亡者の魂が一緒に寺へ来ていると考えられている証左となる話であると思われま